

国民の選択

経済破綻の危機に直面しているギリシャでは、6月17日に国会の再選挙が行われ、この結果、ギリシャ国民はユーロ圏残留という意思を示しました。

今回の再選挙は、5月に行われた総選挙において緊縮財政推進派が過半数の議席を獲得できず、連立交渉も不調に終わり新しい政権を作ることができなかったために、改めて国民の意思を問うために行われたものです。

ギリシャの経済危機はユーロ圏の危機であり、それはまた日本はもとよりアメリカや中国など諸外国の経済にとっても大変大きな影響を与えることとなりますので、世界中がギリシャ国民の選択に注目していました。その意味では、今回の選挙結果に、世界の国々はとりあえずホッとしているというところでしょうか。

しかし、緊縮財政派が勝利したとはいえ、再選挙の結果を見ると、実に微妙な匙加減だったことが分かります。欧州からの「離脱おそれ、緊縮派へ」という見出しを書いている新聞もありましたが、ギリシャ国民は雪崩を打って緊縮派に票を投じたという訳ではありません。

各政党の、今回と前回の獲得議席数を比較すると下表のとおりですが、

政党名	今回	5月
※新民主主義党	129	108
※全ギリシャ社会主義運動	33	41
急進左派連合	71	52
独立ギリシャ人	20	33
黄金の夜明け	18	21
※民主左派	17	19
共産党	12	26

(注) ※は、緊縮財政推進派

新民主主義党が議席を増やした一方、反緊縮財政派の急進左派連合も議席を伸ばしています。

緊縮財政派の新民主主義党が第1党となったとはいえ反緊縮派の急進左派連合の支持も高く、結局、ギリシャ国民は、無条件に緊縮策を受け入れたのではなく、「厳しすぎる緊縮策には批判的だけれども、ユーロ圏からの離脱も避けたい」という、微妙な、揺れ動く意思表示をしたといえます。

今回の選挙結果を見ると、「1票の重さ」ということが良く理解できると思います。一人ひとり、それぞれ自分の考えで1票を投じたに過ぎませんが、それが塊となった時、まるで生き物のように一つの意思を表し始めます。

「たかが1票、されど1票」ということです。

さて、財政危機といえはギリシャだけではありません。アイルランド、ポルトガル、スペイン、イタリア等も軒並み厳しい環境に置かれています。マスコミは、ギリシャにおける総選挙の結果を以てしても、欧州の金融危機は一向に先行き不透明であると報じています。ギリシャの財政規模は決して大きくはありませんが、経済のグローバル化が進展する中、その動向は欧州はじめ諸外国に大変大きな影響を与えることとなります。

今後、新民主主義党が中心となって政権を樹立することになりますが、ギリシャの再生に向けて、一日も早く力強く動き出すことを期待しています。

(塾頭 吉田 洋一)